国東半島宇佐地域世界農業遺産推進協議会　令和３年度保全･活用のための調査研究事業

# 農林水産業における世代と地域のかけ橋となるリーダーシップ講座

―リーダーシップにおける質問力の効果に関する調査―

【調査研究報告書概要版】

大分大学経済学部社会イノベーション学科　河野憲嗣

国東半島宇佐地域世界農業遺産（GIAHS）の活動におけるリーダーシップについて調査した。農林水産業で自然界に関する専門知識を持って活動する集団で求められるリーダーシップ、良いリーダーの育成について知ることが問題意識である。リーダーシップの定義は多様であるが、ここでは次の３項目を充足することとする。

① 成果、目標が共有されている

② 目標達成のために自ら動いている

③ 目標達成のために周りの人に働きかけている

はじめに GIAHS の関係者がリーダーシップをどのように認識しているかを調査した。アンケート調査では「リーダーシップがある」と自己評価した人は 11 人中５人、「ある」と自己評価しなかった人は 6 人だった。またリーダーシップの考え方については「その人が置かれる立場によって決まる」と答えた人が 11 人中 5 人いた。「本来備わっている資質である」と「そもそも全ての人が持っているもの」と答えた人はそれぞれ 2 人いた。「その人の言動で決まる」と「教育、訓練で決まる」と答えた人はそれぞれ 1 人いた。

次にリーダーシップを学ぶことでリーダーシップに対する認識が変わるのか、また認識が変わることで人の行動は変化するのかについて調査した。リーダーシップの学習には「質問会議」という手法を使った。この会議は、意見を言わず質問とそれへの回答だけで進める手法である。発言を質問の形にすることで「相手の思考に働きかける」「場へのインパクトが和らぐ」「考えが整理できる」といった効果を発揮する。質問という行為によってリーダーシップの３項目が実行できることを体感できる。

COVID-19 の影響により、質問会議を用いた学習は概要の説明までとなり、ワークショップは実施できなかった。概要の説明を受けた GIAHS の関係者から任意に 2 名を抽出してインタビューを実施して認識や行動の変化について定性的な調査を実施した。その結果、2 人共リーダーシップの発揮を示す３項目を実践していることが確認できた。ただし学習以前からリーダーシップを発揮していた話もあったため、その行為がリーダーシップの学習によって起きたとする確証には至らなかった。

今回は、調査計画全体を俯瞰して参与観察することも狙いとしたため GIAHS の専門家メンバーや事務局員も対象とした。GIAHS 活動の事務局である県庁職員の働き方にもリーダーシップが発揮されていたことが確認できた。リーダーシップの学習内容に触れることで、専門家メンバーにもリーダーシップに関する認識や行動において前向きな変化がみられた。GIAHS の関係者向けにリーダーシップ講座を設定できたことから、GIAHS において良いリーダーを育成する組織的な素地があることも確認できた。

以上